



門へ 13
3096
巻 6

再編胡蝶物語序

蝶物語序

下野馬野郎
彈正忠能

復讐の稗史を成畫としてより、あまハ九年、
の、
所為とんあつたがら、生活の二字は、
よりあよるるなる男子一足は、
五尺の蛇と安撫と目くし、
里つるへんくけたる、
書賈も今は寡なり、
長き

昭和九年
七月二十四日
購求

の智囊と絞りの出て臨むる去年の暮らうら
と氣味くえり。胡蝶物語と著しる落が来ら
板元の白、えりて喜めりて今茲も正月のちえんくら
後編の催便の抄耳よ入ふりぬる一日晩のちまけ
月和花曇より五月舟の障もぬぎ武作墨の曲形
あもらばけ後が盆前もくや遠くは詩の生ぬ草
本と案よ勉て筆紙起て再編四冊と綴りす前後
九巻の冊子とあり信や河豚と感むりの美味を
賞して中々紙のど又稗説と海りの賞るとありて

苦しを厭も河豚の中ふハ蝶ある家こ於蝶のあらハ
板元の耳垂珠よりあるべし。去らば此書紙於蝶と
余の河豚のたの歌ありも実を毒も茶も
たあらば世の親吾よ居膳と板屋がある花の壺
も板末師の鑄不鯛の月も室よ為の彩板三味
シ居る紙づくと耳の子舞向の控白を左子も受て
六この編よの序すといふ。

文化七年庚子夏の日 曲亭馬琴



食言郷産物之圖



煩惱郷産物之圖



哀傷郷産物之圖



血の南彌陀

後世の浪

四鳥の輪鏝



かがり屋の
うらた
のうらたの
袖で
ぬらと
ぬら

歡樂郷土産圖





夢想兵衛
紀行と編知

再編胡蝶物語總目錄

第一 食言郷

夢想兵衛 虚月爺二と談論のり

第二 煩悩郷

耳目の慾心乃憂小勝ざれり

第三 哀傷郷

夢想兵衛 湖洞の雨やどりるるり

第四 歡樂郷

人間に歡樂無數を量のり

每巻小批評あり 目錄畢

夢想兵衛胡蝶物語後編卷之一

東都

曲亭馬琴戲編

食言郷

食言と何ぞ今更こととつども明日輒変易せり。食言のり
 已不吐く。復されを吞ぐ。むり成湯の誓文。朕食言せどつども夫食
 との偽あり。食言則欺詐盡と。介雅て小書をえともまれ。されば犢鼻を
 引締て萬事は虚とせむ。さる人と渠奴の食ぬ奴といふ人と。誰をも食らふか
 為そのいつらりやも取べきあり。道家の虚説の不老不死浮屠の虚説の
 天堂地獄莊子の寓言孫子の武略。この是世の為人の爲と合てえれば
 偽の文字は實語のつれども。浅るるがる。凡夫の欺詐。尻中結ぬ草環の
 いと可愛の女郎の万八客やど欺詐をえぬと。俳諧者流の滑稽可

かけさらし正直正魯よきとて。まもそのんら夢想兵衛へ負藝團の大圓ふ。
 福の神の真助ふりて。種ろふ世紙老姥あつたて。ふさび空中へ閃き登りし。
 紙鳶をふみかきこめて。意は随ふと。蘇武が雁でも。林連が鶴でも。ならく
 追ひはくとも。あふべ小使あがらして。下畏へたらふと。あふたの紙老姥
 ふりてと。まも来て。檀那どの。要と。まも。まも。登へたらふ。その。隨ひ。く。と。天へ。升。と。
 あつた。まも。まも。相場。と。いひ。あ。が。ら。その。自由自在。る。と。二百。十。の。器
 也。洗。足。で。洗。ま。り。列。子。が。風。由。羨。し。か。げ。淮南。が。丹。飲。ま。も。ひ。り。ま。り。い。け。い。
 仙人の樂を知らず。あつた。奇妙。く。と。い。ひ。さ。う。じ。て。紙。鳶。の。背。へ。大。胡。坐。髻。被。倦。て。
 吞。む。煙。草。も。咽。え。さ。ま。ま。あ。つ。た。紙。鳶。忘。ま。甚。麼。を。鳥。公。に。た。ま。わ。り。あ。ま。り。理。屈。で。堅。く
 ち。く。う。う。と。氣。と。う。え。て。耳。近。い。胸。へ。あ。ま。ま。う。う。ま。り。所。見。く。と。く。お。ろ。し。て
 たり。お。れ。い。の。と。ま。ま。と。通。り。橋。は。紫。巻。し。昼。食。が。海。の。旅。客。が。小。休。急。ぐ。さ。う。な。

口狀一俤理論が。本の。作者の。趣向。で。あ。り。の。紙。鳶。を。理。り。ま。り。の。檀。那。ど。の。と
 ろ。う。と。ま。も。ま。ま。の。紙。鳶。の。非。情。の。造物。も。其。知。ま。り。ま。り。ま。り。ね。ど。も。安。譯
 くと。彼此。と。す。ら。う。り。ら。あ。ま。り。ま。り。ま。り。大。ま。り。浮。遊。を。つ。た。ま。り。食。言。郷。へ。ま
 お。ろ。し。ま。元。來。ま。も。ま。で。か。め。の。國。ま。り。ま。り。ま。り。ひ。ま。り。め。て。出。放。臺。町。は。名。も
 高。く。壺。月。希。次。郎。と。鳴。ま。り。野。鉄。炮。の。師。絶。ま。り。浪。人。ど。の。表。借。屋。臺。野
 万。八。の。旅。店。は。宿。ま。り。ま。り。ま。り。の。地。の。形。勢。を。え。る。不。利。態。の。為。は。他。を
 ま。ま。偽。り。て。世。の。人。と。飲。ま。り。ま。り。世。事。と。い。ひ。或。は。れ。を。愛。想。と。い。ひ。世。の
 へ。浮。遊。の。別。号。あ。り。て。歌。作。の。論。議。の。樂。屋。あ。り。ま。り。人の。女。房。を。あ。り。ま。り。て。形。造
 振。と。ま。り。ま。り。ま。り。蔭。で。小。指。の。か。の。の。と。ま。り。ま。り。ま。り。ま。り。ひ。坊。さん。あ。り。て。ま。り
 さん。ま。り。お。鬘。が。ま。り。ま。り。ま。り。目。前。の。町。嚙。態。も。ま。り。の中。に。彼。餓。鬼。と。女。儒
 め。が。ら。ま。り。困。り。果。る。と。ま。り。ま。り。ま。り。ま。り。ま。り。ま。り。何。日。其。所。其。首。へ。

古今和歌集卷之六

五

お供と称ひまは。拙者かどうりも誘引せしむ。と立流し約束までおいて本日
ふるれば音もせざと経経て逢へばすらくと。彼日何や故障ござうて火急の
要更まどう紛れ。近年の巾不約束と萬るの欺詐も聞とあつたればおの
奸智より引くべて人を疑ふと。習が性となるのるれば子と教るとあるも
化團あつとわつ。あつるふひの金剛穿てらうく走り忽地は。跌と輶と稚児
が。その候よりと泣出せば。母親遠て走り出坊ハ強いも。金と拾つ。泣きくと
抱き記すと。まぶく合紙拾ひもせぬよ。金と拾つこと。お親の欺詐とあつ
承知もて泣止む三才児の魂百まで金と。いふまは痛さと忍ぶも。さうこれ
の教よる。春平の世ハ夜戸を鎖ど。途は送合紙拾つごとく。竟舜以来乃
通り文句貪りと心清く。いりぞ送金と拾ふべき。金と拾へば。大さな厄送
め。返とせむ。い。それハ。の團法の。拾て人あも告ま。せむ。おのが懐抱へ納

と。バ。忽地天の外と蒙る。送しりの念ひでも。始終其金が身小著べきや。
金と拾ふハ禍と拾ふ小等。と忍ぶ。さ。小。金と拾ふと教る。祝の。欺詐ハその子と
捨多小似し。とまぶ。これらも。妻と兵衛が。氣あへさらく。容。れ。れ。も。福の神の
教を守りて。面アふ。ハ。い。ひ。も。懲。ら。さ。び。苦。く。げ。よ。こ。こ。と。ん。捨。て。又。先。の。町。へ
来。と。ん。せ。ハ。推。見。携。る。夫。婦。花。山。母。親。が。背。く。り。附。紐。も。て。あ。ら。す。れ。ハ。多。く。ハ
向。へ。走。り。抜。け。こ。ま。で。ご。れ。禮。を。ん。ぢ。よ。と。離。し。な。が。ら。子。と。叩。け。バ。推。見。ハ
真。実。の。禮。と。飲。ま。と。と。幼。少。菟。也。と。走。り。去。バ。又。又。六。間。引。退。き。禮。を。ん。ぢ。よ。
と。ゆ。た。く。ゆ。け。ど。も。く。禮。と。飲。せ。ぬ。ゆ。も。よ。ぢ。れ。が。来。て。め。を。お。れ。る。が。べ。つ。う。り
尻。餅。撞。と。破。撞。泣。と。そ。ら。れ。母。親。が。て。引。抱。へ。胸。を。ぬ。ひ。ろ。け。て。さ。あ。飲。め。と
矢。庭。は。乳。首。と。ほ。う。と。と。よ。れ。バ。忽。地。は。泣。止。ど。も。と。そ。も。の。と。に。を。め。め。か。り。乳。汁。を
飲。そ。と。い。ふ。と。バ。飲。せ。ぬ。禮。で。導。く。う。祝。の。信。と。い。べ。け。は。乳。汁。ハ。毎。日。飲

韓非子

卷十一

曰曾子

之妻之

市其子

隨之而

泣其母

曰女還

顧反為

好我吻

適市未

曾子欲

捕虱殺

之妻止

之曰特

與嬰兒

子曰嬰

子曰嬰

鬼非與 戲也嬰 見非有 知也待 父母而 學者也 聽父母 之教今 子欺之 是教子 欺也又 不信其 母非以 成教也 遂氣 也 鬼 之 戲

そこのありてめづらけねバ禮と欺くも名よ子のあけど。その偽と利欲
 とりて。推きりの成導くや。大さくある小隨て。祝の欺詐とえられ。芝押れ。
 親と祝と何れも名よ。たれめハ祝ガ子と祝。後ハその子ハ祝ガ祝され。
 の一は推びの志をりして。本錢の財布貯くあり。身上の大黒柱へ大さく。竅と
 あけられて。やうやく爰の爰。る公持所詮祝のゆ。は。後ハ。勸當と之按
 と定め。初度ハ長屋へ世話と被祝分振。長口仗憎奴といハ偽り。信ハ
 可愛い子と捨。浮世の藪の菽医者ハい。も。さ。なる。扁鵲でも。此と投
 する身の膏爛ハ切。も。断。ね。凡。夫。わ。く。ても。嘘。ぬ。りの。君。む。曾子
 の内。系。分。市。へ。ゆ。小。元。子。跡。追。て。淳。く。バ。母。只。こ。と。を。賺。し。て。い。や。う。お。ん。え
 大人。く。函。守。し。て。の。よ。虱。美。烹。て。食。そ。く。い。曾。子。これ。と。受。て。虱。と。捕。へ。や。て
 殺。んと。と。け。く。く。その。母。遷。て。推。止。め。あ。う。や。戲。で。ご。ん。と。く。い。曾。子。ハ。臥。を。掉。

そのの。戯。よ。い。あ。つ。て。も。嬰。見。ハ。実。情。よ。る。之。推。き。の。の。何。の。も。祝。と。え。ら。ら。ハ
 の。の。る。小。欺。く。と。を。教。ん。や。子。と。欺。て。信。る。バ。何。と。り。て。教。と。せ。ん。と。答。て。嬰。を
 責。ん。と。と。い。ん。亦。明。の。王。釋。夫。と。い。ん。と。こ。ハ。三。世。の。子。を。教。る。不。妄。語。つ。く。と。を
 第一の戒とま。う。と。り。ん。食言郷の習信るれば。さ。う。と。你。さ。夫。婦。の。中。で。も。偽。り
 か。ら。る。の。の。と。と。孟。子。ハ。所。謂。妻。妻。よ。婦。者。矣。梁。子。也。又。多。う。り。外。の。死。に。ご。り。も
 り。り。う。舞。て。杜。鵲。の。声。も。早。子。よ。む。る。こ。ろ。隣。家。へ。脊。負。込。む。浴。衣。地。を。此。方。の。女。房
 ハ。羨。し。く。り。檀。那。へ。今。茲。ハ。活。衣。ハ。さ。う。さ。る。あ。れ。不。ど。流。行。と。麻。乃。紫
 鹿。子。と。一。度。も。被。る。ん。と。と。吐。け。バ。亭。子。も。あ。い。ど。聲。う。れ。拊。活。衣。ガ。欲。く。と
 い。う。で。も。好。ま。り。の。と。被。さ。る。去。年。拊。へ。と。綿。縮。の。草。物。も。俺。ハ。力。う。倦。う。ら。う。
 そ。の。の。の。縁。纏。よ。る。が。り。兵。服。屋。う。ら。さ。う。よ。せ。て。入。て。は。ろ。く。る。持。て。来。ぬ。聖
 聖。去。日。の。ら。履。と。穿。出。し。ぬ。な。活。衣。と。見。ま。く。や。ら。の。と。當。も。な。の。の。又。梁。と

孟子の

七



あつち
えせうと
ひて
とこな子と
あつち
人

子のころんざ
をく合と
いうん
ひんあや

夢見の六衛後編卷一



夢見の六衛後編卷一

赤石雜
志卷六
家訓稿
餘の條下
を併るる
ペーニホハ
但その場
をひく
のこ以下
本文を
奉む

り。バ女房もぬぐぬ顔近属母さんかぶるさうさうとん。名護屋へ幸便がある。有松被と五六反跳て遣。程よ今茲ハ浴衣をどうやん。どのひがさうさうさう。後。いさうの由被らさす。おま。彼綿編は倦みさうさう。夏の洗は。まやせう。といさうさう。出。赤りや。口。可。惜。袖。を。裁。ち。女。の。不。獲。る。何。せ。ば。亭。主。の。一。張。羅。の。草。物。を。ち。や。れ。口。の。絆。屋。へ。た。の。ん。で。も。涼。さ。せる。本。綿。の。浴。衣。を。え。て。来。さ。う。と。出。り。け。さ。あ。が。宜。儀。何。と。買。い。と。好。る。ま。は。腰。よ。荷。さ。る。残。入。を。て。廿。四。文。が。乾。菓。子。を。さ。の。へ。袋。を。持。と。鼻。紙。へ。さ。と。押。褌。を。汗。水。ふ。て。立。止。ま。の。女。房。も。さ。と。と。多。ど。り。や。と。お。ま。ら。せ。ん。て。お。ま。浴。衣。の。さ。う。ま。ま。さ。う。と。聖。り。さ。せ。さ。苦。い。と。同。バ。莞。尔。と。う。ら。笑。ま。て。さ。れ。ば。さ。う。つ。せ。り。半。日。の。間。費。し。て。百。反。の。す。り。の。浴。衣。地。を。さ。と。ど。も。く。不。定。氣。の。果。を。果。て。さ。と。と。れ。ば。菓。子。を。出。さ

や。酒と出さ。又。その死走で目とら。浴衣の買。ば。ぬ。つ。が。そ。ま。は。ある。去。年。進。ハ。大。枚。の。呉。服。物。を。他。ど。現。金。を。買。と。花。主。も。何。と。買。て。も。買。でも。何。日。由。死。走。と。し。ぬ。と。い。ひ。つ。途。で。買。て。来。と。乾。菓。子。を。何。ん。と。投。出。せ。バ。女。房。ハ。お。ろ。ろ。と。入。て。呉。服。屋。で。出。と。菓。子。ハ。版。で。押。と。や。う。る。安。り。の。あ。へ。の。煉。羊。肝。も。些。ハ。合。る。身。も。あ。る。と。こ。の。つ。も。肩。ど。よ。美。菜。と。い。お。ら。つ。つ。の。の。鮮。魚。賣。拂。い。が。目。と。多。ど。も。ま。ん。ご。素。通。り。由。り。の。と。索。簾。を。推。あ。げ。て。小。さ。ろ。の。が。ご。ご。り。ま。い。ら。い。の。と。さ。親。バ。亭。主。を。さ。う。さ。い。り。て。鳴。乎。返。り。し。月。今。松。魚。を。二。本。買。し。よ。聖。又。ご。せ。買。て。や。う。と。い。ふ。は。鮮。魚。屋。苦。笑。ハ。今。茲。ハ。河。岸。で。松。魚。と。い。つ。て。ハ。一。本。も。見。え。け。せ。ぬ。え。ん。ご。と。を。あ。り。や。と。い。は。せ。ぬ。ぬ。ど。膝。立。る。身。今。時。の。初。松。魚。か。ら。い。の。目。入。り。の。と。只。一。口。は。や。り。こ。し。る。ま。ん。ご。見。え。透。く。欺。詐。と。い。ふ。と。腥。り。の。あ。つ。く。悲。し。と。ハ。耳。を。潰。し。て

赤石雜志卷六家訓稿

ナ

まうり夫婦の間より又栄と見れば他人と取らば又夫と擬らば大晦日乃
帳面も勘定合て残はるねど家も務まる松飾も人足五人の多間と厭は
夫婦の季秋の俵で居ても仕忌の絆天花や小家の跡と漆させて世間
と飾り牙の清輝とでもあつた借ん救計とてや機園の糸も切き術計
盡て尻尾と見れば残るうその皮財布。ままぬ口ハ憑きとどろくと
降まハ脛怪は残る人の子と見えバ遠くわ雅しとてお娘さんの愛敬
りの色丁を黒け目鼻だらハお奶さん又生肖女子の痘瘰ハるふとなく
可也一のりのねとまめふいと流石ハ老功乳母ハ泣くも傍痛く汚随
るふばよけととも。枳椇みそややくあけと鼻の穴ハ松たくり。これめて
待や令ふひむとめ。らうとらうとめ持糸でハ婦人娶人もあつたひし。
こんかお子の乳母とると実ハ肩身がす不する。と苦く志の顔と見れば

そんや癩人の瘡うらも山吹色ハ刺印と打せとござる檀那どの。そ刺印よ
あやうつて玉面でも大なるの守袋へぶらさげる。迷子れの中うみのう
沢山の。から喃娘さん阿爺ハ人形あげさせ。聖又お出と捨けぬと子供ハ
正直まうけて。それうら顔と見るよびふ。お主人形おまじでるのう。お兄さん
あも紙をと張てあげよふとつてお取らねと耳の端ハ鮎のわ行催役
まけてもいけちやあまやあ人形ハ出来させ。おまじ又衣が出来させぬ。聖
去月ハ大誓文此度りくまらわらう。阿又爺とあまらおまじのういと説
うよ又説と當望うつれのでた。わ口状俄出のんあうど女子と見えハ
輪とかけてあハ世鏡の平一面おまじ芝居ハお好くわうまじてハいつうのれど
三階でも表でも。こまじの芝居ハ幅うらう。いつ何時でもお出るさん。積も合も
いつとごやごやうませぬ高土間でも鶴でも。近ハ処でおあまじ。わらじまじ

ちんいいで進いのぞごぶりませう。今見えやうはしよ。何ぞとめるよややら。
 一知よ連て来まばよの。とりひつゝ危福へまてゆく。あつててもやぬ蕎麥が。
 一日ちつてのまばとて。持てまよふへは。そちちらよるうらなや亭午ころ。
 肚餓くふるる腸の冷む。三人一所よら小便よ。閑所借るがよ。具負あて。
 胸のまぬくま一宮せこの。紙入せして掃る母と。二重純子よあよねども。此二ハ
 ふめる服帛帯送り三重に残り。土産の餅菓子一重と損ころへて小ま
 月泊とまてかふるま海さい河豚沙よ喰く風情あて。供の老僕よ面目もだり死
 知一ふり日和癖降ふぬらふと立ぬる。跡小夫婦の月を合し。とんどりのが
 志けらんで軽く大さふらうせられと。土間でんても膝づめ。三方金で追ひ
 つらぬおとぶじと。喧けバ女房の苦くげふ女とると目ぐるのうら。如才の
 ろめてとんどめよあふりの。おまのへせと。地洞と出し。るまのりち口状。

是らつちのりが実情と。とんでらの園の習俗あて。槌とりつて庭を掃る。お鼻乃
 塵とらと紙身の勢とする。あま小清清。袂面皮の徒せの。よれ人と譽離。
 くれよ満りのあま。秘ハ世のうがんとて。数あも入と。その見識の昇こと。
 野雪隠の庇のど。請合口状あて。あつねバ小便所の張れよ。似え。されど
 世才よ長されバ。金終るど。いんためうら。みむく。いめて承知させ。借返返
 ののあれど。欺詐と故。お困風るれば。互に潔一。班さる。約束妻易を考とする
 ちえ。先日。の返礼よ。こまの品と進上り。それ。近づら。香いと。礼をいせ。て
 その後の愛美。あま。いひ。出さ。び。堪ら。後。催候と。れ。さ。あ。う。ま。と。ご。う。う。ま。あ。ひ
 んで。あた。ち。こ。ま。の。虫。乾。の。布。て。進。せ。と。さ。け。け。け。換。投。と。あ。て。も。け。ら。ね。と。是
 ちも。懲。ど。口。あ。ら。の。ふ。方。へ。更。の。む。く。ハ。亦。是。一。ツ。の。不。思。議。く。夢。想。兵。衛。し。や
 える。毎。よ。安。く。毎。小。傍。痛。く。い。て。の。け。え。よ。の。も。が。れ。と。女。子。と。小。人。ハ。養。ひ

せじと云ふは偽しと欺まぬ用ゑと云ふより外はまゝなり。今茲も暮て彩玉
 の事のためふるじふ。有一日虚月爺二部が門へ紙牌と出して明日
 欺詐のつれをいじし浮落執心の輩へ出来仰ぐ所と写しこれバ
 爰忠兵衛の果を果這奴のこの國一の口利と云ふ。いふる欺詐と云
 せん時をあれ。これらづこのめので説伏て食言御を立地は老実國と
 るさんびと持病俄頃より再復して形を違へと云ふ。行は早且より支度して
 爺二部が前門へかえすひちうせ門へ續して人教あり。今日他行と
 紙牌と出して。このめよりみとぬさび果まで。けくんと云ふ。さる爺二部
 ころの紙も精しと竊ふおそれ空居をつらふと云ふ。憎さも憎し。と
 ひらうとて背門口より一覗けば折戸を寄けて。あはれ爺二部の室は
 あり。さればとて遠く折戸を用ゑてこゝを入り。今日欺詐のつれ初と

らけのつり。聴聞の為推系する。前面へ他行と写して。續しゆの糸は
 かに某の日本國の旅客も爰忠兵衛といふ。のこ。すりや及ぶ去年より。
 臺野乃八が旅館ふとせと。とて二句も欺詐つらふ。りつらふ。さる爺二部
 とて。乃八の集會をこそくと。止らるるふのゆゑや。抑もが神國の風俗を。
 貴と賤さかへる。て正直実義を肯とせり。彼三社の神託をどのゆりの
 ふも。欺詐つらふの字りゆのむとあり。されば管家のもんめ。ゆふ。ゆふ。信
 の道は。つらふのひる。げ。祈らざとて。も神や守らんと。すえのみ。あつるふ。この國人の。
 浮落ふ。て偽妻く正直実義といふ。こ。鬼の毛で刺さ。行も。某奴く。この
 るの紙敷く。こ。のの。乃八の集會を幸ひ。は利害を説て。後人ホが。解を
 解せん。と。ひつるふ。かくて。の。失ふ。は。似たり。偽りの。の。怖とあり。
 先生。これ。怖く。ふ。あ。ふ。の。とて。居る。から。門を。續く。乃八の集會を止め

むる。ぢふの似ぞ卑怯と。嚼つてどくはなまひバ。希二郎とを喰ふ。或
 じ呵と。とらち笑ひ。おん牙いまど彼が足下ね。欺詐の詐詐。所所を
 むべ。僕この紙牌を。今日欺詐のつた。と。写世を。実するの
 ちて。来て。えと。門を。續して。化行と。写と。是則。欺詐の。尺。初。あ。と。や。
 り。さ。の。顔。せ。と。く。今日。人。と。集。合。る。べ。流。む。所。欺。詐。と。も。さ。の。ふ
 り。ひ。所。実。る。の。と。ある。か。く。て。の。忘。語。つ。た。と。い。へ。ば。さ。ん。と。早。乾。より。門。を
 續。く。化。行。と。と。ら。り。室。は。隱。居。が。と。た。の。亦。是。化。行。の。欺。詐。の。い。う。で。り
 見。牙。と。思。ふ。べ。さ。と。執。篋。の。下。は。愛。虫。兵。衛。の。堪。う。ね。て。あ。り。あ。り。現。あ。り。に
 辺。の。音。よ。さ。く。欺。詐。つ。た。る。れ。ば。さ。も。あ。や。痛。い。う。み。若。曹。欲。さ。る。所。狂。人
 小。齊。一。巧。言。令。さ。少。さ。を。仁。と。い。ふ。欺。詐。の。乱。離。の。本。あ。り。て。國。君。欺。詐。を。つ。く
 と。た。の。臣。妻。侮。り。民。役。の。ど。士。庶。人。欺。詐。を。つ。く。と。た。の。親。族。離。と。朋。友

助け。む。む。じ。管。叔。の。流。言。つ。く。や。成。王。と。ま。を。実。言。と。く。周。公。と。危。む。ら。し。め。
 又。彼。褒。姒。が。巧。言。つ。く。幽。王。と。ま。を。欺。び。て。周。室。遂。に。傾。さ。ぬ。欺。詐。の。名。教
 は。害。ある。王。糊。へ。携。て。い。へ。う。べ。諛。語。後。納。の。詐。り。の。邪。る。の。の。ぞ。う。し。
 巧。言。浮。誕。の。詐。り。の。佞。する。の。の。鄭。の子。産。と。い。ふ。賢。人。は。生。魚。一。尾。饋。す
 り。の。あり。子。産。技。人。は。分。付。て。こ。ま。を。池。に。ま。田。へ。と。り。か。う。け。め。つ。り。ぬ。と。惑。つ。
 濃。汁。を。之。に。竊。小。食。す。さ。を。子。産。は。稟。じ。と。仰。よ。志。さ。が。ひ。件。の。魚。を。池。へ
 水。と。放。せ。ら。う。が。圍。く。馬。と。て。ま。づ。沈。む。洋。く。馬。と。浮。の。が。り。悠。悠。と。一。く
 忽。地。は。深。底。へ。入。り。て。ゆ。と。老。實。る。魚。で。告。げ。る。子。産。の。こ。ま。を。信。ず。り。て。こ。の
 亦。を。信。ず。る。哉。その。所。を。え。ら。り。り。と。滅。達。を。上。よ。う。ろ。こ。る。技。人。退。出。て
 冷。笑。ひ。誰。う。子。産。を。智。者。と。い。ふ。や。これ。既。に。彼。魚。を。烹。て。食。ひ。し。を。あ。ら。ば。ば。て
 その。所。を。信。ず。る。と。可。笑。と。と。揆。せ。と。ぞ。その。方。を。り。て。よ。れ。ば。君子。と。い。ふ。と。も



欺詐の
 譬え
 三人
 市よ
 虎と
 ると
 とろ

欺ふ。况て闇君凡人庸信耳と信して虚実をまよべ可好むの流れ
易く刊をちりぬりの陥まらる。魏の麗恭といふとこのありと死魏王は稟を
申す。今人のりて告まらば市の中は虎ありといひ。これを信とまらぬや。王
笑てさら笑ひ虎の千里の菽の柄めど。それを信とまらぬのほ。二人来て
さしをまらば。王信とぬらぬ。されば信とまらぬとも二人来て。如此
いひ。寡人も些疑ふべ。三人来りて告まらば。夜そのとれを信と甘んといひ
らまらるものあり。夫市あり虎ありはほど。三人は信とまらぬ。傍りの受けは
す。めり笑消し。二度ハ疑ひ。三度ふまらば。その欺詐を遂は信とまらぬ。ぞりし
これハ孔子の一番才子曾参。鄭の圃はあるとぬ。又その圃は曾参とす。
名字同小人あり。その人の人を殺せらる。ある人曾子の母は告て曾参
人と殺せといひても母の信と甘ん。此方の息子の孝ゆりの人あると殺して

とへり。とまらば。つ布を織り。見知りもせぬ。あるは。又一人走り来り。
曾参人と殺すと告ぐ。そのとぬ母の耳を引きて。半ハ疑ひ半ハ信ト。とぬ
か。よぬまらら。又一人走り来り。婆さままら。曾参人と殺すと床の
毒や。といひも果ぬ。母親ハ周章。村と投捨めて走り出らる。曾子乃
母の賢る。とら。三度の欺詐ハ信とまら。一大形は吼るとぬ。郡犬ハ声は吼也。
人の欺詐ハ。が欺詐といひ。か。とや。いふ。つぐ。多く人ぞ。信るぬハ
その可と知らぬ。車は輓軌るぬ。が。と聖人の宣ひ。将君子ハ詐を逆む。
又信ぜざる。と。億ど。人信寡け。と。その言遂ひ。行む。と。浮薄の耳を
搔む。便佞利口の舌と搔む。言ふ。言ふ。一生涯ハ。と。席薦
と。敲て説諭せ。爺二郎頭と。うら。掉て置。と。蒸鱖鱖の背は。目乃
と。親と。眈と報ひ。め。め。と。いふ。と。連声。め。ひ。め。といふ。と。不孝

の子共と懲さふ為の古俗の欺詐虚説であるけは世に知られど商人の
 虚誓言文も妻子眷属と親さふ為に品類へんけむる。買ふるをやく
 損トすまるといふてハ買人がるのゆゑまぎく粘で固め物と得要むたと
 偽るも。まぎ直との相説あそ。安うらふ又くるわらふハいどとまぎと
 一文と。百損するも買人の好く説さといふとも罪あるべし。まぎと
 世間の人情ハ偽りを欺ぶ。必きていつてまぎの傾城狂ひするりのあふん
 小十人の客十人あがら女房やそく惚す。といふと妄言といふあつるが
 説さねば外に説さるが。おりの泳いりのあまバ丁を。身とも家とも忘る
 るれ。さればとて傾城も。欺詐をうつくりのあふあま偽の中も真あり。まの
 中も偽あつと。陰陽といひ虚実といひ特殊といひ。管といひ陰陽虚実と
 自然の道理水ハ火を滅せり。のるれど水氣小よつて火氣と倍と。雷電を

えてこれとあれ又火と氷と水氣と引く。井戸堀りのよるごと。あつれば実のもの
 枝葉と附頗虚説と加味とまぎ世俗の耳入る故。故りも口碑は残るあつる。
 孫子又兵の詭道といひ詭の詐と欺。又達と異。敵と戦ひ城と落すも。
 欺詐と上手ふつくりのハ必勝とといふと。僕孔明南朝の楠がごとく成
 大臣とて物あつげはまぎまぎとも。その軍をさると受け。まぎ詭の計。詭と小
 敵とといふの。されば又物の本。史傳記録は虚文まぎ。左氏傳國語
 史記漢書比校て見まぎ異同あり。舊事紀ハ古代の塞りの。今写本あまぎ。
 日本後紀ハ書名の詭。小説野乗は至てハいどとまぎ。虚説かうまぎと。
 ころつた古びる奇譚紀山海経も妄誕らる。英雄人と欺けハ呂不韋が
 虚説ハ呂覽のまぎ。趙擘が偽ハ呉越春秋。まぎらハ通と秦漢物。于宝淵
 明が搜神記。段成式が酉陽雜俎。唐から虚説ハ流れ止。まぎまぎの心を

假名物語。竹取のうらみどい万葉の歌のうらみどい。虚説をつたひろげ。美福門院と縁
 てハ。玉藻前と縁をつく。源氏挟衣以下ハ。傍てハ。是ぬらをつたの。事として
 世の人跡重き。虚説でも昔の力のとハ。咎めぞ。今つくうそといひさう。
 半ひらうそをゆひね。且く古書の虚文をつら。む。唐山堯の時。日輪その致
 十ヲ出さう。その熱さ。大暑中。煎餅を焼く。頼ひよあぶ。万物焦と
 焼く。帝堯弓は。箭うち刺ひ。片端から射ち。あふ。九ツの日輪ハ。忽ち
 隨て跡のく。滅残る。ツの日輪の。朝も出て。夕も渡るとハ。宛るもの。大万八
 夫人の弓勢ハ。百歩の外も。あふ。びび。天の高さ。九万里と。大約も。推し
 つら。堯ハ。聖人なれば。と。九万里先の日輪と。射て。落され。苦の。或ハ
 羿が射とも。り。の。づ。ま。あ。ても。勅定。あ。は。ど。加。以。日。ハ。火。こ。り。一。把。の。薪。と
 射て。強弓の人。と。色。を。射。とも。振。く。その。火。が。射。滅。さ。る。へ。と。天。の。火。ハ。地。の

火ハ。似。ど。と。色。を。射。んと。い。ひ。く。難。し。或。ハ。り。九。ツ。の。日。輪。ハ。鳥。の。妖。精。真。火。乃
 日。輪。あ。て。ハ。ひ。只。徳。と。り。て。こ。色。を。滅。さ。す。の。も。墓。田。鳴。絃。を。さ。る。め。り。と。い。ふ。と
 ち。と。く。大。虚。説。く。彼。九。ツ。の。日。が。實。物。な。ら。ば。萬。物。ハ。燒。焦。さ。れ。と。輩。で。焼。さ。す
 鬼。火。ハ。草。木。少。許。も。燒。さ。る。と。く。この。理。由。由。て。推。さ。れ。ハ。熱。と。い。ふ。も。又。虚。文
 也。是。を。真。の。火。と。さ。る。と。死。ハ。火。と。水。と。その。性。も。ひ。火。と。射。て。殺。て。滅。さ。す
 あ。ぶ。又。水。と。射。て。落。さ。ん。欵。堯。の。時。ハ。水。逆。流。し。て。民。の。害。を。蒙。り。た。ふ。帝。堯
 の。ど。て。弓。箭。と。り。て。水。を。退。け。の。ら。り。水。ハ。寔。に。射。べ。か。ら。ん。或。ハ。り。日。の。光。を
 聖。王。万。物。を。憐。む。と。凡。常。よ。あ。ふ。さ。れ。ハ。その。箭。ハ。天。よ。及。び。ぬ。と。も。精。誠。と。い
 て。九。ツ。の。日。輪。と。消。す。の。み。と。い。ふ。夫。聖。人。の。精。誠。と。り。て。九。ツ。の。日。を。滅。さ。す。あ。ぶ。
 洪水。も。又。精。誠。と。り。て。忽。ち。退。け。の。ら。ん。と。い。ふ。その。ゆ。ゆ。日。と。滅。さ。す。似。ゆ。ゆ。日。ハ
 の。ふ。を。や。又。禹。の。水。と。治。す。七。年。や。七。功。と。説。く。堯。も。禹。も。聖。人。と。天。ハ

遠く地へ近し。まづ小遠を天火を滅せども。近き地水と退けぬ。聖人の
 徳も又お紀さうぬ所あり。その詐偽推て去る。そのもそれらのあまらふ聖人乃
 徳の高きをいれんとて。却実と失へる。多世博士が拙と虚誇。或は周乃
 武王殷紂と対んとて。孟津と渡りぬ。風波猛吹荒きて。王船反覆らんと
 志し。武王左手小舟を執り。右手小舟を貫鉄操て。目と瞋く。はし摩さ
 余。今天が下あり。誰うか意を害ふべき。とまづりぬ。忽地は風波収り
 志し。つり。ご虚誇。夫風天地の氣。風と天地の號令と。武王の聖人
 紂王の悪人。聖人まづり。殘獨の紂王と討亡く。民の塗炭を救ひぬ。小
 天とて。悪人の紂を助け。聖人の王船とまづりぬ。とらぬ。まづり教へ
 武王風と憎めて。目と睜て。罵りぬ。風の神が怒るべし。只一言ふや
 こめられ。つり果し。つらもろえがじぬ。三世の常言。小天を罵りて。唾く。とらぬ。

あびがたはよびきて。武王一身の力をよせて。呪と腫。あまとも。その声
 天をぞくべし。風雨をよめ。からど。厄難。人の賢不肖。ふり。文王の
 美里に囚ふ。孔子の陳蔡。糴と種。と絶り。ども。罵りて。脱れぬ。小舟。啼く
 見と叱り。泣き。泣馬と鞭で。はま。く。跪る。相罵りて。好文。辞と安寧。や
 民と安んず。と。曲禮の度。揚る。小武王の廣言。聖人。不似。その安。結る。と
 推て。ま。べ。む。日本武王。夷僚と征伐。の。と。上。徳。團へ。渡らんとて。既
 脚船と舟。の。人。の。暴風吹荒。きて。いと。も。危く。見えぬ。ひ。か。戈と操。摩。執り。
 天と罵り。ま。よ。と。の。咄え。と。夫。日本武王。の。猛。武王。は。勝。了。の。ま。と。遠。は。小
 この君の武威をりて。風波をひきぬ。めぬ。は。原。是。天。火。る。れ。は。後。河。の。牧
 小舟。狩。て。夷。ども。が。放。せ。野。火。を。草。薙。の。斂。り。て。拂。ひ。退。ぬ。ま。と。人。作。の。野。火
 は。も。あり。は。ん。聖。王。良。將。と。り。と。り。と。も。武。威。り。て。天。火。の。め。が。じ。或。と。り。

葉師堂と建主と成神と安置しその吳驗といひあはして公曉と同族中
 への成と世の人よあはさるる詐偽を諱く虚文とまふばや。其時近属
 建立せし成神の守護より死を脱るる正の八幡宮の正は源家
 累代の氏神なる小実朝社系より夜八幡大神又教ふまふるる
 情がほゆる浮文も教へ立るる。千万言も尽すべし。夫実強は増云あり。
 史傳は飾文いと多し。董狐のなげその時。佞媚を記記者稀なり。
 悉く虚文を咎めば。書るるはあはさるる。且聖人も載言あり。二三
 子偃之言は是也。前よ言ひの戲之耳。と孔子の作らさるる。又この聖
 人病のふよ。家臣ひたりもあはさるる。子路充の毒もあはさるる。門人
 とし家臣と。しは病ひの間あると死よえし。のりの中や鳴乎由
 が詐とわらふと下よ。これよ家臣の死りのとと作せられしとあはさるる。子路の

孔子十哲の賢人あれど欺詐をつく。凡人のやうに欺詐つごらん頃目さけむ
 この國の親しから欺詐とそと成。その子どもら小教るとして。めんを無理屈の
 けける。それハ大さるる不簡らるる賢ふ育へ教ふよ。暮藺の蔓乃春
 生ゆる。その秋大風あるべさ年ハものづから低く。草木え来非情
 あり。こ道らへ教てある。小の次鳩小三枝の札あるも。鳥よ及哺の孝あるも。
 氣が親とやひよが亦も。鶯語が人の口よ似るも。その性ありとく
 教ふよ。次子習せの学問せの三種習刺縫せと朝々晩々を息勢
 強ても耳ハ鏡板大不用忘るるといといと早く。おろえうぬるが世間の童男
 寺女の庸るるよ。欺詐つてせせうとて。その子も又欺詐つたよ。
 びるとそのハ枚子定規。甚廢そよでのあるまふると罵つけらるる。
 夏秋兵衛のどいども大息つた。現よ紫の糸と奪ひ。鄭声の雅楽を



夢枕十兵衛後編巻一

九の
日七
か
王



夢枕十兵衛後編巻一

今か
日七
か
大

乱る。利口の邦家と覆るとの真は此辺のりるべし。性ハ善なり。情ハ慾あり。生るがらよく理を。あるりのハ聖人の。凡夫はとて教よられ。彼暮藟蔓の風と。その年低く。這ふかど。暮藟の性。のあつ。る。氣候より。自然の理。の。南枝は。南枝は。合歡木の骨。鳩雁の北。玄鳥の南。より。も。天の氣候。は。隨。鳥の及。哺。鳩の三枝。も。餘。の。準。て。易。し。夫。万。物。の。天。地。と。又。母。と。と。の。天。地。の。氣。候。は。是。の。子。の。賢。不。肖。も。も。親。の。教。よ。る。由。孟。子。の。母。也。可。惜。機。系。絶。下。也。天。地。不。順。る。れ。五。穀。登。り。草。木。也。枯。槁。親。の。教。育。が。あ。け。し。ば。子。孫。不。孝。は。て。その。家。鳥。り。と。も。又。自。然。の。理。あり。虚。実。と。ぬ。ら。び。ら。は。論。せ。ら。れ。也。寓。言。と。邪。說。を。り。と。只。管。古。書。の。錯。悞。を。奉。て。田。へ。水。を。引。く。は。や。

石りて玉と偽り。廉を弁て馬とひめても。識者これをあざる。又玉の為よけし。子の父の。兄才。牆は。闌。とも。外。の。侮。を。禦。ぐ。が。非。を。わ。ら。ぶ。似。れ。ど。も。骨。肉。乃。信。その。中。あり。孔子。の。戡。言。ハ。門。弟子。を。勸。ふ。為。の。信。を。子。路。が。詐。り。と。斥。と。あり。信。の。篤。き。も。下。の。老子。の。虚。を。仙。氏。の。方便。在。子の。寓。言。孫。子。の。武。略。淳。于。髡。が。滑。稽。は。至。る。まで。實。ら。ず。也。虚。な。れ。ば。味。ひ。あ。く。世。は。益。あり。夫。兵。ハ。凶。器。あり。戦。つ。て。勝。を。良。將。と。す。孫。子。が。鏡。の。計。ハ。人。を。傷。ら。じ。と。の。信。あり。老子。の。鏡。ハ。為。と。す。と。ハ。詳。微。妙。る。れ。バ。實。が。り。り。と。是。を。識。と。れ。ハ。天。窓。の。蜂。を。捕。ふ。は。是。の。莊。子。の。寓。言。変。化。は。愈。々。也。譬。喻。の。實。を。失。へ。ど。も。流。り。の。道。は。ら。く。淳。干。髡。が。滑。稽。ハ。い。ひ。あ。く。と。り。て。の。ける。風。凍。る。れ。ど。解。易。し。也。發。て。い。ふ。

五月の頃童子の青梅をかぢるありて。その母禁人ととるふゆゆ捨む。
 こゝろ不圖ととと途ふとと。あつが隣家のひさ。息子常と青梅と嗜
 う。俄小腹痛してひびくるありぬ。及ハ七日の速夜るれ。墓よりありと
 生るふ。らふも又青梅と嗜む童のありけり。とそれとありありとた。
 童子且く顔とらちやめりてゆふりて。梅と捨るりのの稀く。こをを
 仏の方便とも。又淳干髯が滑稽者とも。孫子が武略。莊周が寓言ともいふぞ
 か。あつふ梅と捨むとて。子どもよ。その梅俺よ。その代は残せりと。
 のて賺して取あげて。残と易と利とありて。導くられハその子よ害あり。
 又残ととせねば。欺くことを教ると。さて亦世々の書藉ともふ。うたにとこ。記
 せハ傳写の増言ともある。ハ幼懲の為ありて。近く。多ととるりのと博く。多
 ととるは。イの端とハ聖ものいふや。我渾とととも。産とるさ。と。地獄変

相の説るんど。現あぶ。と。のるまねど。疑ハ。成仏と。あつふ。ふ。國入
 ハ。胸中一点の信あり。人を欺くと。牙の利と謀り。流言邪説を。と。と。
 口才浮薄。奸智は長古書の疑。と。穿鑿。と。凡慮の決断は。任とる
 る。んど耳塞でも。痛し。い。人の愚ハ。愚直。今。の。愚ハ。詐るの。技い
 ハ。要は。劣る。馬鹿。と。欺詐。と。尽。の。い。は。は。古。あ。も。傷。の。ひ。れ
 世。り。り。神。月。誰。信。う。ま。ま。ま。あ。け。ん。曉。と。と。説。破。れ。ハ。爺。子
 居丈高く。あり。おん。牙。が。近。づ。れ。の。聖。人。の。隱。ま。し。る。を。索。め。性。を。行。ひ。
 後。世。は。述。る。も。あ。ら。ん。が。こ。れ。ら。の。せ。ど。と。ひ。り。と。述。て。他。せ。と。信。し。て。古。を
 好。む。の。ん。ど。い。は。ま。し。と。と。忘。ま。て。狄。寓。言。の。方。便。の。勅。告。の。懲。惡。の。こ。の。が
 勝。子。は。名。の。つ。ま。と。と。の。死。と。他。の。い。ま。の。欺。詐。あり。これ。聖。人。は。あ。つ。ふ。れ。の。汝
 汝。が。悞。詫。を。つ。け。こ。れ。の。口。が。欺。詐。を。つ。く。も。咎。る。ふ。足。ら。ず。ん。だ。汝。の。足。ら。ず。ん。だ。

畢竟虚名の名実のと高下をけけて生老実ふたふんでえても情あり。
 名のよる少必利がなる。和の為小名を好み。虚名とも以名実とも
 以品丁そくはま似りのろく。うづと嫁やら妹やら。つけてのりまぬ鼻の
 先さうい。とぞくばよいで得む。かくりみ希二郎そのむじ。菽蔭よありじとた。
 野沃炮をうらまひして。尻のきうこと卑下せり。人々甚しく珍重しとく。
 重月希郎菽蔭中み。尻を放り。世上の風声。是よりして名が高
 なる。好むよ名利を獲て。そく生活ふあるぞし。又おん身が旅宿とする。
 基野万八つた。万八傳よ我らして。おひの外み入もあはれ。名よる。
 更利とゆ。凹であるけま。水も溜らむ。業が高くと利も溜らむ。名と
 りん吸膏某で吸とま。まけの吹水見る。やうふ。高いとこ高く利も
 るく。名利とへう。ゆりゆりの。片輪車ハ轆。かじ。虚実ハ車の両輪

のどく。生老実あま。溼訟家あり。良火あま。榭官あり。菫瓶あま。バ。
 羅貫あり。仏あれ。衆生あり。三回張あれ。水飴あり。柳ハ翠花ハ紅の
 いろく。夢啖ふ虫も。もの好き。三寸不乱の舌をり。つて。片意地を張り
 通。千万言を費し。その國の人よ。説てハ。ま。い。り。とも。の。ま。み。は。ま。
 と。と。ら。ま。ら。ふ。兼。あ。ま。ら。が。や。う。ら。う。を。る。れ。バ。い。ハ。无。達。之。の。あ。ま。て。そ
 昔の人も。椽よ。あまの。九夷よ。居ら。みの。と。述。懐。ハ。吹。え。る。ふ。お。ん。身。を。ん。ど。が
 瘦頤で。説。れば。と。て。啖。つ。い。う。と。と。齒。形。も。つ。く。國。で。ハ。凡。生。と。一。活。る
 りの。声。の。れ。バ。か。ろ。ろ。バ。発。せ。梅。よ。雪。の。蚕。屋。の。蝦。蟄。も。和。歌。を。詠。む。と。ま。
 吾人の。放。詐。公。治。長。よ。あ。ま。れ。バ。鳥。獸。の。啼。声。ハ。何。と。い。や。ら。や。ま。ま。ね
 ど。日。外。下。の。日。待。の。夜。檀。那。さん。ぐ。藝。を。一。様。下。司。の。話。説。の。尻。へ。ま。る。
 も。虚。説。で。る。け。ま。ば。落。が。来。ま。ど。春。の。花。の。め。ど。と。造。り。花。を。賞。既。

本八丈... 上州八丈... 鮎の昆布巻... 鯨の
昆布巻が多く賣き... 鰻鱧の蒲焼屋の隣... 海鰻の糞賣
店あり... 太夫も身揚り... 日あれば夜渡のむ... 夜へは... 真と
偽の看板あり... 似て非なる物を飲ぶ... 銭との相違... 中
晦日は月へ出るとも... 真と間尺... 唐山楚の國は直躬
といふ所のあり... 羊を竊へ... 直躬と王は湯... 荆王が...
又を執て誅えんとする... 又よ代アを死んと清へて將... 首加えんとする
と死よ吏よ告ていふ... 又が羊を竊るを明白... 湯... 是ふのが信あら
むや... 又よ代アを死んと清へ亦孝行ふ... 信ありて孝ある所の
誅... 荆王... 終よ直躬を救へ... 魚鱈の
先聖... 異るる直躬が強て信といふ... 二六の又の友をりて

かのが名を取る... 眉うら... 頻めら... とぞかく
ての信... 尾生が女子小契... 橋梁乃
下よ俟てごされ... 居らふといふ... 妻易... ちどもく... 的へ来む
ま... 待ぬ夕... 満て... も... 退て... 情あり... 欣詐
つとみ... 橋梁よ... 水... 死... 馬廉正直と... 笑... 或る... 骨の... 母... 姜氏と
恨... あり... 黄泉... 見え... 誓... 後悔... 願考
叔が教よ... 地を堀... 穴の中... 親子... 対面あり
も... 舌と二枚... 負... 穴... のりと致され...
諸... 物... 臨機... 信... 入ると... 瞽家の一心... 被... 後悔... ちどもく

はくし〜信くら。親い友と中しあひ人と恨るるものあり。されば
歌も。偽りのあり世ありり。神無月。貧乏神の牙をもてるも
ど。今から欺詐の黠計りりして世のの誓古と励む人と。さて
もつぬ返答よ。爰は兵衛のまじく果是。叔孫武叔と仲尼を
毀了。嬖人臧倉。孟子と識る。いつさまか我馬麻りのよ。係りの
へたさる損あり。これ今ひさの直さは因んぐ。衆の枉まるの
と。醒さんとこれと正直りのと。馬麻よつたる菜利の比丘尼
の鬘挿索んらう。宿うえせん。とありひさ〜。その俵外面へ
まゝり出。天を瞻てう。扱けば紙老時。忽ちとまひさがり。爰は
兵衛をうけ糸せき。まゝ空中へひかめれ登る。何國とら
る。飛せ行く。

○總評

評小云。邪説の人を傷る。その害帛狼より甚し。まづれども。
君子と義よこと我。ゆゑは害りく。小人と利りこと我。
ゆゑは害あり。人世才り。逞しれと見え。これを稱し〜
経済家ぞ。亦彼浮薄の人と見え。これを稱し〜
と云。経済世才と混ぶべからず。一。磊落と稱せんと
りのへ。老荘方外の徒と作らるべし。これ夫世才よ長
たふと見え。我。経邦濟世の才よ似せ。これ彼浮薄の人
と見え。小。磊落出塵の叟よ異あり。理義よるること容易
からざ。人と知ると難くもある。耶。世よ。莊子の一書と読
て。その荒唐とらるべからぬ。のへ。まづ。莊子と知るべからぬ。

あつと。庄子すうしの所謂すいごう嘉落からくの人ひと世よより人ひと嘉落からくの人ひとあつと。

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

夢想兵衛胡蝶物語後編卷之一畢



